

動物遺存体の調査 (5)

埋蔵文化財センター

1988年度に調査した動物遺存体の主なものは、広島県福山市、草戸千軒町遺跡の第36次調査資料、兵庫県明石城武家屋敷出土資料、千葉県八千代市白幡前遺跡出土資料、同県佐倉市大作遺跡出土資料などであった。以下、その概要を述べる。

草戸千軒町遺跡から出土した動物遺存体の主体を占めるものは、哺乳類ではイヌ、魚類ではマダイである。イヌの骨は散乱状態で出土した例がほとんどで、四肢骨の関節部には鋭い刃物による切傷や、火であぶった焼け焦げなどがあり、中世にこの町に住んだ人々がさかんにイヌを食用としていたことが明らかに出来た。魚類では大型のマダイが主体を占め、クロダイ、ハモ、ウナギなども目につく。マダイは身だけでなく、頭部には出刃包丁様の片刃の刃物で叩き切った痕跡があり、おそらく、現代の「兜煮」のような調理法が行われ、頭まで無駄なく賞味されていたことがわかる。また、サケ・マス類の椎骨が完形のまま出土していることも特筆できる。瀬戸内沿岸では、サケ・マス類は分布せず、おそらくは北陸地方のものが、京都や大阪を経て草戸までもたらされたものとかんがえられよう。『延喜式』の記載から、すでに平安時代に塩引きされたサケ・マス類が、毎年大量に都にもたらされていたことがわかり、この遺跡から出土したのも、塩引きにされたものであった可能性が高い。また、ハモの頭部には、身をおろすため目釘をうったものがあり、日本料理の伝統の一端が窺えて興味深い。

兵庫県教委の調査によって、18～19世紀の明石城武家屋敷跡の溝から発掘された資料にもイヌが多かった。とくに頭蓋骨の右側頭部には、直径3～4センチの穴が穿たれ、ここから脳髓を取り出した例があった。四肢骨にも包丁による切傷がみられ、食用となった動物の骨をまとめて投棄した事がわかる。近世の武士の動物食については、文献史料の上からは多くの記載が指摘されているけれども、考古学的に明らかな証拠が得られたことは、まだ多くない。

千葉県文化財センターの調査した白幡前遺跡では、平安時代の土坑から、最低2頭のウマと成人の左右大腿骨が、各1点ずつ出土した。台地上の遺跡であるので、骨の保存条件は悪く、土坑の底部の骨だけが残存していたようである。大きな土坑を掘り、その中にウマと人間を葬るのは、なんらかの戦乱の犠牲と考えられよう。

同じく千葉県文化財センターの調査した大作遺跡では、円墳の周濠を切る土坑から、馬具を付けたままのウマ、1頭分が出土している。ウマの骨そのものは、原位置をとどめる上下の顎歯しか残らないけれども、銜をつけ、鞍や鐙などを付けたまま埋葬されたことが、歯と金具の位置関係から明らかである。年代は馬具の編年から、6世紀前半ということである。人が死んだ場合、ウマを殉葬させることは、「大化の薄葬令」の禁止条項にあるが、実際にそうした遺構が検出された例は多くない。今後、各地で古墳の周辺部の調査が進めば、類例が増加するかも知れない。本例は、古墳時代の葬送儀礼の解明に貴重な資料となる。 (松井 章)